

第44回全国中学生人権作文コンテスト(法務省、全国人権擁護委員連合会主催)の各地方大会が行われ、北海道内では254校から6488作品が寄せられた。札幌法務局と旭川、函館、釧路の地方法務局の管内ごとに審査し、それぞれ1作品、計4作品が最優秀賞(法務局長賞)に選ばれた。学校生活や家庭での出来事などを基に、人権や社会の問題に向き合った最優秀賞4作品を紹介する。

中学生人権作文コンテスト 道内最優秀4作品

■函館地方法務局長賞

北海道函館聾学校2年

ふくい りょうま 福井 稜馬

ぼくは聾学校に通っています。小さい頃、家の近くの公園で遊んでいる子どもたちと一緒に遊ぼう、と声をかけてよく遊んでいました。ときには、中学生や高校生、そして大人とも遊ぶことがありました。ぼくは両耳に補聴器をつけていますが、それでバカにされたり無視されたりすることは一度もありませんでした。それが当たり前だと思っていました。

そんなある日、「聲の形」という映画を見ました。主人公は聴覚に障がいがあり、あまりしゃべることができない女の子で、その子と出会う男の子との恋が描かれた学園アニメです。ぼくは、「聴覚に障がいがあり、話せないだけでいじめられるのだろうか?」と正直驚きました。「でも、アニメだけの話で、現実にはありえないのでは?」と思いつつ調べてみると、予想に反して、子どもだけでなく社会人を含む大人もいじめられる事件があるということが分かりました。他の人と比べて能力が低いから当たり前にだと思われ、給料を下げられたりパワハラを受けたりしたことがあると書かれていま

コンテンツの力

した。ぼくの当たり前は、社会の当たり前とは違っていたのです。そのとき、何か変な疑問がわいてきました。「大人の社会でもいじめられることがあるというのに、ぼくと一緒に遊んでくれた人たちは、どうしてぼくをバカにしないか?」とぼくは、なぜか不思議に思いました。ぼくは、ぼくが考える一番の理由は「声の形」という映画によって、障がいを持っているからという理由で、いじめてはいけないうちから、いじめていけなくなっているのではないだろうか。実際、一緒に遊んだ人たちに尋ねてみると、「映画の名前は忘れたけど、そういう内容の映画があったのは覚えてる。」と答えた人がほとんどでした。そのため、映画やアニメによって、障がい者も同じ人間という尊重を持つようになったようです。この尊重という気持ちを表す言葉の一つに「リスベクト」というものがあるというのを学校の先生に教えてもらいました。早速辞書で調べてみると「リスベクト」は、

ありのままの相手に敬意を持つ、尊重するという意味で、だれかと比べて秀でている人を敬う気持ちとは違っていることでした。

実は「聲の形」には続きがあります。小学校でいじめを受けていた女の子が転校することになり、今度は女の子をいじめていた男の子が周りにいじめられることになるのです。そして、この二人は高校で再会し、昔の出来事を話し合うという運命をたどりましました。「許す」ということは、ただ過去をなかったことにするのはなく、お互いの痛みを本当に理解しようとするのだと感じました。簡単なことではないけれど、人と向き合う第一歩なのかもしれません。言葉にできない思いがあっても、心を通わせることはできるのだと気づきました。それが、この作品が伝えたかった本当のメッセージの一つなのかなと思います。

この物語を通して、たとえ相手に傷つけられた過去があったとしても、もう一度向き合う勇気があれば、人と人はわがや合つことができると気づきました。誰かを尊重するということとは、その人の過去も含めて受け入れるという意味もあるのかなと考えようになりました。そして、いじめや差別のない社会をつくるには、そうした心のつながりが大切だと思います。リスベクトの気持ちをはっきりと許すことにもつながるはずです。

これからぼくができることを考えたとき、アニメやマンガなどの「コンテンツ」の力を借りて、リスベクトという気持ちを誰にももてるようになるのではないかなと思います。実際、「聲の形」はフィクションですが、このようなコンテンツは障がいの有無男女、年齢、住んでいる地域などにかかわらず、とても親しみやすいものです。そのため、学校の授業でこのような作品が取り上げられることで、子供のうちから相手に敬意を払う、尊重するということ、気持ちが育てられるかもしれません。また、大人になっても映画やマンガを通して忘れかけていた大切な気持ちを思い出さなければならぬかもしれません。また、コンテンツには、言葉で直接伝えるよりも心に響くものがあるので、ただ楽しむだけでなく、そこから学んだことを行動に移すことができる人が増えてほしいとぼくは願います。そして、ぼく自身も誰にでも優しくできる人間でありたいし、これから出会う人にも障がいがあるなしに関係なく同じように接していきたいと思っています。